

# 歌を教材とした日本語教育と異文化コミュニケーション

TERAUCHI, Masanori / 寺内, 弘子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

95

(開始ページ / Start Page)

225

(終了ページ / End Page)

237

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004603>

# 歌を教材とした日本語教育と 異文化コミュニケーション

寺内弘子

## 目次

- I. はじめに
- II. 異文化コミュニケーション教材として「歌」を使用した授業例
  - 1. 『時代』
  - 2. 『遥かな轍』
  - 3. 『都会の天使たち』『恋は火の舞, 剣の舞』
  - 4. 『関白宣言』『関白失脚』
- III. 「歌」を教材とすることの効用
  - 1. 自由に意見が言える
  - 2. 日本人の心情理解のため
  - 3. 歌のことば
  - 4. 固定観念の打破
  - 5. 社会的に見る「歌」
- IV. 今後の授業展開についての私の夢  
—オープン・クラス—

## I. はじめに

私は当大学で社会学部三年と経済学部一年の外国人留学生に対する日本語講座を担当している。

20年以上にわたる日本語教師の経験の中で私は種々の日本語テキスト、新聞記事、文学作品、現代詩、ビデオ、ゲーム、まんが、ことわざ、マジック、そして歌などを教材として取り入れてきた。

学習者に日本語を正しく早くマスターしてもらえるように手助けするのが日本語教師の役割と心得るが、対象者の性別や、年齢、国籍が多岐にわたるので、各種の教材を各々の事情に合わせて適材適所に使い分けていくことにも重点をおいている。

その中で、現在、私が最も力を入れているのが「歌」である。

私は常々「歌には不思議な力がある」と思っている。もう25年も前のことになるが新米の日本語教師時代に日本語を教えたアメリカ人女性を訪ねて渡米した時、彼女は開口一番「日本語は全部忘れてしまった。でも、これだけはよく覚えている」と言って、『ぞうさん』を歌い出した。この歌は彼女の子供が日本の保育園に預けられていた時、子供と一緒に聞き覚えたもの。大柄な彼女が踊りを交えながら、15年も前に覚えた歌を2番まで完全に歌ったのだ。

私共も中学校で英語の時間に教えてもらった英語の歌は、30年以上経った今もそのメロディーと共に歌詞もスラスラと口をついて出てくるのを経験している。第二次大戦中に日本の兵隊が歌っていた歌を聞いて覚え、50年後の今でも歌えるという人も多い。最近ではカラオケブームにのって日本の歌が世界各国で愛唱されている。

この不思議な力のある「歌」を日本語教材として活用しない手はないと考え、今「歌」を教材とした日本語講座の授業を展開している。以下、その授業例と「歌」を教材として使用する場合の留意点をいくつか述べることにする。

## Ⅱ. 異文化コミュニケーション教材として「歌」を使用した授業例

### 1. 『時代』(作詞・作曲：中島みゆき)

この歌は世界歌謡祭とポップコンでグランプリをとった曲である。

「今はこんなに悲しくて涙も枯れ果ててもう二度と笑顔にはなれそうもない」という一節があるが、ここでいう「悲しみ」とは一体何か、をディスカッションのテーマとして提示した。ほとんどの学生は「恋人、肉親、親友など愛する人との別れ」と答えたが、中国からの留学生の一人が、次のような見解を述べた。「『時代』という題名と、歌全体の歌詞を聞いてすぐに思い浮かべたのは、文化大革命から天安門事件に至るまでの中国の若者の悩みや苦しみです。その時代の知識人弾圧、追放という大きな流れの中で、いくら勉強したくても、いくら知識を得たくても個人の力ではどうすることもできなかった。そういう時代の流れの中で若者たちが味わった悲しみや苦しみを表していると思います。でも歌詞にもある通り、時代はまわるので、今はいい時代になっています」。この意見発表の時は一瞬教室中静まり返り、しばらく誰も発言できなかった。

ミャンマーからの留学生は「今、どんなに悲しくても辛くても『時代』という大きな流れからみれば、『今』はほんのわずかな一瞬であるし、時代はまわっているのだから、いつかきっと笑顔になれる日が必ず来る。だからこそ『今』を諦めず更に前へ進むようにと私を勇気づけてくれる応援歌です」と結んでいる。

ディスカッションに参加していた日本人学生3人は、授業後、異口同音に次のような感想を述べた。

「感激した。一つは留学生の日本語のレベルの高さ。二つ目は留学生がこんなに真面目に物事を深く掘り下げて考え、積極的に意見を述べること。そして、三つめは日本の若者は何と幸せなんだろうと思った」。

私は、この言葉に胸を打たれた。積極的に意見を言わない、とか、議論を好まないとかの風評もある日本人学生が、しっかり見聞きして、的を射た意見を述べてくれたからである。

私は彼らの意見をきっかけとして、留学生のためだけの授業ではなく、日本人学生も参加できるオープンクラスにしたら、双方の学生にプラスになるだろうと思うようになった。

## 2. 『選かな轍』（作詞：小椋 佳，作曲：堀内孝雄）

冒頭の「こうとしか生きようのない人生」とは「どんな人生か」について質問した。

「現実の厳しさにより自分の夢を捨てざるを得ない人生。現実に妥協せざるを得ない人生」というのが大部分の学生の答えであった。更に具体例として、「結婚し妻子を抱えて企業のしがらみの中にいるサラリーマン」（中国）。「自分の夢が経済的にも社会的にも安定した生活に結び付きにくいので、自分の夢を捨てるか修正して、安定性のある生活を手に入れるか、または苦勞することはわかっている、非難されても、今の安定した生活を捨て自分の夢にかけるのか、どちらかを割り切って選んでも、こうとしか生きようのない人生である」（韓国）。「普通のサラリーマン生活を送りながら、夢を追って生きている友を羨ましく思うだけの人生のこと」（韓国）。「世の中はなるようにしかならないことが多く、運命によって定められ、他の生き方を選べない人生」（ミャンマー）。「自分の夢、理想をもっていても現実の中で自分のおかれた立場上必然的に型にはまって生きてゆかなければならない人生」（中国）など、大体正し

く意味をつかんでいるようだった。

そこでさらに発展させて、「この歌の中で『お前』と『自分』という言葉が出てくるが、この二人はどんな関係か」を問いかけた。すると、「学生時代、青春時代からの男同士の友達」と、「もうこの恋に夢を見ることができなくなった男性とそれを切なく思う女性の恋人同士」（韓国）という二つの見方に分かれてしまった。恋人同士ととらえた学生は「愛の喜びについて」「熱く語り」「強く信じている二人の永遠であるはずの愛」に対して「燃えるまなざしを投げつけてくる」と解釈して譲らない。

この二人が「男女の二人」か「男同士の二人」かでは、後半部分の解釈の仕方が大いに変わってくる。私は、学生時代からの古い男同士の友人で、40～50歳代のサラリーマンとして中堅層であると仮定した。「こうとしか生きようのない人生だ」と、ある種の諦めを抱きつつ人生を歩んできた二人が再会し、話し合ううちに、各々の胸の中に若い青春時代の夢をまだ持ち続けていることを確認し合い、「夢抱きしめなおす自分に何故か歎んでいる」男の姿だとしたのだ。ところが、学生のうち、一人は「男女の二人」だと主張し、その他は「夢をもたない、又は、もてない、つまらない人間」と解釈した。「人間、夢をもたなくなったら人間としての資格がない」と言う。教師対学生で熱い議論となった。大きな夢を胸に抱いて頑張っている若い留学生と私との年齢の差、あるいは国情、文化の違いを感じさせられた。

また、このディスカッションが盛り上がったことを、「先生にいじめられた」と感じた学生もいたようである。アジア系学生の受け取り方は欧米人学生の反応とは大いに違うことを実感したわけである。

「遥かな轍」とは何かという問いに対しては以下の通りであった。男女の関係を主張していた学生は、「彼にとってすでに過去になりつつあるこの恋に対して、自分なりの思い出をつくろうとする男のエゴである」としている。他の学生は「潜在意識の中にずっと存在していた夢」（韓国）、「自分の心の中の消えない夢を表している。こうとしか生きようのない人生を歩いても、せめて心の中の夢だけはいつまでも消えないように大事にしていこうという意味」（ミャンマー）と理解している。また、「この歌は40～50歳代の男たちの人生に対してだけでなく自分に当てはめてみると、『こうとしか生きようのない人生』という言葉の意味をもっときびしく考えてみたい」（韓国）と結んでいるものもあった。

3. 『都会の天使たち』（作詞：荒木とよひさ、作曲：堀内孝雄）  
『恋は火の舞、剣の舞』（作詞：多夢星人、作曲：堀内孝雄）

冒頭の『この都会に眠りの天使たちが遊びに疲れて夜を運ぶ』の「遊び」の定義につき、私はいわゆる「大人のちょっと危ない遊び」と解釈していたのだが、学生たちは「仕事、勉強を含めた生活全般を『遊び』ということばで表している」と主張する。私は思わず学生たちの純粹さ、真面目さ、若さを感じとった。そして一人の学生が、「まさか大学の授業で、先生がそんなはしたない男の生活を取り上げるなんて考えられない」と強烈なパンチを發したのには思わず赤面した。

次の週は、やはりニュー演歌の『恋は火の舞、剣の舞』を取り上げた。題名からもわかる通り熱烈な恋の歌である。

授業に参加していた日本人女子学生が「日本の女性はこんなに女性の方から男性に働きかけはしない」と言う。若い女性がかかなり古くさい固定観念にしばられていて「日本女性は控え目で慎み深い」と考えているのか、外国人留学生にはそうしてもらいたいという心情が働いたのか。これには大いに興味をそそられた。彼女と私で意見が対立したが、その議論の応酬を、留学生たちが興味深そうに目を見張って聞き入っていたのを覚えている。日本人といえども、様々な考えや感じ方があり、一つにまとまって同意見になるとは限らない。年齢差、経験や立場によって、日本人もいろいろなものの見方、考え方があることを留学生に直接見てもらえたという点で有効であった、と改めて思い返している。

4. 『関白宣言』『関白失脚』（作詞・作曲：さだまさし）

さだまさしの歌は日本語が美しく、メッセージが明確なので、多くの題材を提供してくれる。特に『関白宣言』はディスカッションに最適の歌である。『関白宣言』を發表してから15年後に『関白失脚』を世に出した。この15年間に日本社会や男女の関係はどう変化したか。同じ作者による歌だけに興味を抱き、学生も張り切って取り組んでいた。

- 「俺より先に寝てはいけない 俺より後に起きてもいけない。めしはうまく作れ。いつもきれいでいる……」という「俺の本音」について。

中国の学生は全体的に見て「かなりわがままで一方的な命令はよくない」

「あまり好きではない。この妻は家政婦みたい」「女性蔑視」などと手厳しい反応で統一されている。韓国の男子学生からは、『宣言』と言うから問題が起こる。『希望事項』とした方がよい」「こんなことを言ったら女性はついてこない。男性優位は現代でははやらない」「一見威張っているように見えるが、よく見ると愛情を表している」「結婚生活の実情をあまりにも知らない浅い考えだ」と、女性に優しく理解のある男性像をイメージさせるような意見が多いが、「男として生まれたことを誇りに思っていることはいい」「言いたくなるセリフではある」という本音もチラリとのぞかせていた。

韓国の女子学生の反応は、「女性も同じレベルの人間であることを忘れてはいけない」と注文もつけているのもあるが、「理解してあげられる」「男なら誰でも心の中にもっていて言いたがる素直な気持ち」「男らしさを感じて好き」と理解を示すものが圧倒的だった。

●「姑，小姑との関係」について。

韓国の男子学生は、『賢くこなす』ことは大事だ」「嫁に来たからには一步譲歩する心構えを持つべき」「努力によってしのいでいけるのではないかと厳しいものから「男も同じように相手の家族を大切にしなければならないと思う」という心優しい発言とさまざま。

一方、韓国の女子学生は「簡単に考えすぎている。女になってみなければわからないと思う。一度女になってみたらいい」「こんな言葉通りに簡単ではないはず」という反発が主流。中国の女子学生も同じ意見で、アジア共通の難問の一つだという印象であった。

●『関白失脚』について。

韓国の男子学生が「社会的に女性の地位は15年間変わっていないと思うが、この変化は結婚後の当然の帰結である」「時代の変化と共に女性の社会的地位が上がって、家庭内での家長の立場が弱くなった」「結婚前の夢と結婚後の実際の生活とのギャップ」などと述べている。

●『右に定期券，左に生ゴミ』という男の姿をどう思うか。

「ちょっとあわれにみえるかもしれないが、一貫したこの男の生き方はすばらしい」「夢をいつまでも追いかけているような男よりはずっとまして、真の幸せを得る素晴らしい生き方、人生観である」「私も結婚したら同じ姿を見せると思う」（韓国 男子）。女子学生は「こんなご主人を持つ奥さんは幸せ」と素直に喜ぶ姿と、「この奥さんは情けない女性」と同性として批判の目を向け

ている姿が混在している。

### Ⅲ. 「歌」を教材とすることの効用

#### 1. 自由に意見が言える

学習者の日本語能力がまだ充分ではない初級者用教材は、やさしい語彙と文型を中心にした簡単な内容のもの、中級から上級へ進むにつれて、難解な語彙や複雑な文型を取り入れ、常に辞書の助けを借りなければ理解しにくい内容へと進んで行くのが常道のようなものである。硬い内容の論文や新聞でも、小さなニュースから社説へ進めていくのと同じである。この流れは、語彙を増やし複雑な文型にも慣らし、日本語の文章の解釈をさせるには必修の勉強方法である。

しかし盲点がある。教師または教材から学習者への一方通行になりがちだという点である。論文や社説など、いわゆる正統的な内容の教材では、学習者からの発言や反論が成り立ちにくい。「ごもっともなご意見でございます」と受け入れる一方である。

「歌」で取り上げられている内容はどうだろう。人間が本来もつ普遍的で身近な共通のテーマである、男から女へ、女から男への様々な形態の愛情表現。そして、親父から息子へ（『野風増』）、息子から親父へ（『親父の海』）、兄から弟妹へ（『案山子』『妹よ』）、娘から母親へ（『秋桜』）、父親から娘へ兄の目を通して（『親父の一番長い日』）に見られるような家族間の心情も多く取り上げられている。

さらにフォークソングやニューミュージックにもいわゆるメッセージ性の強いものが多く、教材に良い。特にディスカッションの題材として使用すると、活発な授業に発展しやすい。例えば『防人の詩』『風に立つライオン』（作詞・作曲：さだまさし）は毎回 90 分の授業時間では討論しつくせないほど深いテーマを与えてくれる。

歌詞のプリントは、一見、語彙数と文型では、論文調の文とは比較にならぬほど易しいという印象を与えるので、簡単すぎるという不満を持った学習者がいた。当初は同じテーマの新聞記事と組み合わせてみたりもしたが、現在は自信をもって、「歌」を使ったディスカッション形式のみで授業を進めている。

また、歌を媒介とすることによって、普段はストレートに意見を述べにくいテーマについても、肩肘張らずに議論することができるという点でも「歌」教



材を採用する重要な意義がある。

例えば「別れ」の歌。学習者の中には、離婚経験者もいれば、現在悩んでいる人もいる。こういう場合、直接的に「あなたの離婚の原因」について意見を交わすことは無論ないが、「歌」教材の歌詞に関する話題となれば、自由に意見を述べ易い。その大部分が、彼（彼女）の状態を語っていたとしても、最終的には歌の世界のこと、で済ませられる。

質問によっては交通整理をしなければまとまらないほど多くの発言があったり、各々の学生が意見をしっかり持っていてなかなか譲らず、いわゆるホットディスカッションになってしまうこともある。これこそが、いつも活発な意見が飛び交う教室づくりの基盤となっていると私は考える。

## 2. 日本人の心情理解のため

「歌は世につれ、世は歌につれ」というように、多くの人々の心の琴線にふれた歌は、その時代の人々の心を代弁していると見なしてよい。

多くの人々の心をとらえた歌であるヒット曲の内容は、人間の正直かつ率直な心を、「本音のことは」「心のことは」で綴られたものが多い。一曲の歌で日本人の心の一断面を表している。時間的に約3分から5分位の一曲の歌を90分の授業で学ぶ。すると一年間に約23曲、つまり日本人の心情を23方向から見つめることになるわけである。

巷では「日本人と日本文化の異質性」ばかり強調されて喧しい。異質性を論じることは表面的には面白そうに見えるが、同じ人間として、嬉しいことは嬉しい、悲しいことは悲しいという最も基本的な部分を見落としているのではないか。幼いときから多くの外国人の友と一緒に育ってきた私は、その異質論には反発すら覚えたものだった。異質論が巾をきかせているあまり、「日本人の顔が見えない」「日本人は仮面をかぶっている」と評されるのである。

文化が違えば表現方法が異なるのは当然だ。だからこそ文化の差をお互いに学ぶために留学、来日しているのではないか。ところが、相互理解への担い手である来日留学生向けの従来の日本語教材には日本人の心を感じできるようなものは少ない。文化や表現の違いをあげつらう内容が圧倒的に多く、ますます日本人は異質な人種、異星人のような目で見られてしまうのは、危険さえ感じてしまう。

そこで私は日本人の心情理解のために文学作品を読ませたこともある。しか

し一作品読み上げるのに上級学習者でも半年間、通常は一年間。少なくとも3～4冊は読んでもらいたいとすると3～4年もかかってしまう。最近の実用日本語学習者が、この悠長な勉強法を受け入れるだろうか。現代詩を採用したこともあった。学生に好評だったが、暗記するまではいかなかった。その後「歌」を教材としたところ、これらの不備を一気に解消できた。

「歌」といってもカラオケ教室ではないので歌う必要はない。「歌」を聞かせて、歌詞の解釈と理解に重点をおく。心のことばで綴られた「歌」は、文学作品の圧縮版、ダイジェスト版なのだ。

### 3. 歌のことば

「歌」に使われる日本語は、話しことばが多く難解な言葉は少ない。しかし簡単とはいえない。易しい言葉は意味が広く深いからである。

「心に花を咲かす」を例に見てみよう。「心」も「花」も「咲かす」も基本的な語彙で初級の初期段階で学習する単語だが、「花」は何を意味するかと掘り下げていく。「心に花を咲かす」とは「心に夢、希望を持つ」ということである。

非常に似ている文で「心に花が咲く」となったらどうなるか。「心の充実感を持つ」「成功する」「素敵な恋を得る」など、「幸福感を抱く。幸せになる」という意味になる。「心に花を咲かす」と「心に花が咲く」はニュアンスが微妙に違うのだ。辞書をひいて単語の第一義の意味を知っていても、内容を理解したとは限らない。

前項で文学作品の圧縮版と述べたが、「歌」では長い説明がそぎ落してある。行間を読んで理解する部分が大きくなるのである。この「行間を読む」練習によって「言葉の裏を探る」ことを習得でき、日本語の高等な表現方法を学ぶことにつながるのだ。

### 4. 固定観念の打破

「歌」は、日本人の心情を理解する上で適切な教材になると同時に、日本人に関する固定観念の打破にも一役かっている。

例えば、「優しく従順」と見られやすい日本女性。確かに「着てはもらえぬセーターを寒さこらえて編んで」(『北の宿から』)いる女性もいる。一方「好きな男の腕の中でも、ちがう男の夢を見」たり「優しい人に抱かれながらも強

い男に惹かれてく」(『魅せられて』)女性もいる。また、「冷たい女と人は言うけどいいじゃないの幸せならば」(『いいじゃないの幸せならば』)という利己的な女性もいるし、愛しているからこそ身を引く女性(『ラプイズオーバー』『忘れていいの』)や、未練に泣いて悲しい酒を飲む(『悲しい酒』)女性もいる。とても一言では表現できないほどの多様性がある。

「日本人はシャイだ」と一般的によく言われるが、そうだろうか。「白い身体がとける頃、胸の乳房を突き破り、赤い蛍が飛ぶでしょう……恋しい男の胸へ行け」(『北の蛍』)、「この黒髪の前までも、この目の下のホクロさえ、あなたを愛しているものを」(『他人船』)、「心が忘れたあの人も膝が重さを覚えてる」(『雨の慕情』)、「あなたは優しく抱き締めてくれた。あなたならたとえ死んでもいい私」(『二人づれ』)、「骨まで愛してほしいのよ」(『骨まで愛して』)、と枚挙にいとまがない。これらの表現を見て日本人はシャイだと言えるだろうか？ 演歌の歌詞の情熱的なことは驚くばかりである。

#### 5. 社会的に見る「歌」

「俺より先に寝てはいけない。俺より後に起きてはいけない。めしはうまく作れ。いつも綺麗でいる……」(『関白宣言』)と一方的にいろいろな要求を出している結婚前の男の本音。結婚後の「俺より先に寝てもいいから、夕飯ぐらい残しておいて」(『関白失脚』)と頼み、「右に定期券、左に生ゴミ」を抱えて「仕事という戦場へ往く」男の現実の姿。15年の時差をもつ2曲を比較しても、同じ作者だけに、社会や男女の地位の変化を考察してみるのも興味深い。

さらに『関白宣言』の女性版といわれた『部屋とYシャツと私』と比較してみると、「愛するあなたのため綺麗でいさせて。おしゃれにパーティに行かせて」そして「浮気したら……毒入りスープで一緒に逝こう」という女性の言葉をどう考えるか、と投げかけてみる。女性と男性の結婚観について話し合ってもよいだろう。

#### IV. 今後の授業展開についての私の夢——オープン・クラス——

留学生には本当の意味での日本人の友達がいるのだろうか。日本語教師として各々の学生と数年間過ごす中で、絶えず抱いてきた疑問である。

彼らは外国人だが、日本語は堪能。言葉の上での問題はない。ところがディ

スカッション授業で、肝心なところで微妙にすれ違うことがあるのだ。当初は、言葉の足りなさや表現の微妙な違いのためだろうと思っていたが、議論を続けてきた結果、彼らの日本観は大部分がマスメディアからの受け売りであると気付いた。

最近マスメディアのあり方についてよく取り沙汰されているが、素直で真面目な外国人留学生在が日本観を形成する上で、前述の「日本と日本人の異質性」ばかりに偏った日本論に影響を受けているのである。もちろん、テレビや新聞、雑誌は情報収集源として非常に有効であり、情報量から見ても主流となるのは当然だが、実際の体験なくして「日本異質論」に染まってしまっただけでは残念である。

私がこう確信したのは、この法政大学で学ぶミャンマー人男子留学生の例をみたからである。

このミャンマーの学生は授業後、私と10分か20分話し込んでから退室する。教室の外にはいつも一人か二人の男子学生が彼を待っている。初め私は彼らも留学生なのかと思っていたが、日本人だったのだ。彼らと食堂で昼食を一緒に取りながら話したところ、その日本人学生は「彼はすごく日本語がうまくて、今では本当に喧嘩友達ですよ」と言うのである。

このミャンマー人学生はいつも笑顔を絶やさず温厚で真面目で熱心な模範的の学生。日本人学生もどちらかというと穏やかなタイプ。このミャンマー人学生には先輩も後輩もいないので、友達は他国の人の中に見つけなければならない。そうした環境の中で彼は積極的に日本人の中へ入っていったに違いない。この点が中国人学生や韓国人学生と違う点である。彼らは各々先輩後輩も数多くいて、横のつながりはもちろん、縦の関係も強く、このミャンマー人学生のように、強いて日本人学生の友人を必要とせず、同国人同士で悩みを打ち明けたり励まし合ってトラブルを解決できる状態にある。留学生と日本人学生との年齢差、留学生のアルバイトによる時間的制約などの理由もあるだろう。

しかし、ここで重要なのは、日本人の友人に恵まれているこのミャンマー人学生は、歌詞の解釈においても、普通の何気ない会話の中でも、非常に公平な判断の下に、冷静でいながら温かい目で日本人や日本文化を理解していることである。

日本における外国人社会、更にある一つの大学の留学生の世界……と考えていくと、非常にせまい範囲の社会である。その中で判断というのは、時とし

て偏りがちなのは無理もない。

あるクラスで留学生たちから、「不倫は日本の文化である。日本人はみんな不倫をしている」と真顔で言われたこともある。テレビドラマでも見ていると思うのだろうと推測するが、断定するのはどうかと思う。この点に関しても日本人の友人の多いミャンマー人学生は、「日本人だから……ではなく、不倫をしている人は、日本にもいることはいるが、それはどこの国にもいるし、日本人だからみんな不倫をしているなんて思えない」と言っていた。

彼は日本人の友人を通して、日本人の生活、暮らしぶり、考え方を見聞きする機会に恵まれ、自分の目や耳で確かめ、自信に基づいた判断をし、人間的にも一回りも二回りも大きな人間に育っていると思う。そんな彼によって、私は大事なことに気付かされた。5人も10人もの知合いではなくて、たった一人でいいから良い日本人の友達をもつこと。けんかもできる友達を得ることなのだ。それが私の最大の願いである。

大学側でも、留学生を集めての会合や旅行の企画を実施しており、留学生からの感謝の声をよく聞かすが、私は、さらに、日本人学生にも参加してもらえたらと欲が出てくる。

留学生は日本語に堪能で、日本人学生がたくさん回りにいるのに、うまく交流が行われていないということは信じがたいが、事実である。日本人学生も外国人留学生も、特にアジア系は、初めはいわゆるシャイで引込み思案な面があるので、出会う機会を作ってあげたらどうだろうか。例えば中国語を勉強している日本人学生に参加を促す。熱心な語学学習者は、その国の文化にも興味をもっているにちがいないのだから、留学生との交流の中で生きた勉強ができるはずだ。

私の授業をたまたま参観した日本人学生は、「今まではなんとなく聞いたり歌ったりしていたけれど、よく考えて味わってみるとなかなかむずかしくていろいろ考えさせられました」と言った。そして「日本人には全く当然と思えることも留学生にとっては必ずしもそうではないんですね」と歴史、文化、習慣の違いに初めて気付いた日本人学生もいる。このように日本人学生にとっても有益な面は多い。

そして同じ目的をもって一緒に机を並べることを通して、友情も芽生えてくることを期待している。意見を述べた中国人学生に日本人学生が共鳴、同感し、授業後「あの留学生の考えをもっと聞いてみたい」という要望が出たこと

が実際にあった。次の授業時にその旨伝えた時のその留学生の顔といたら……嬉しそうにニコッとしたのだ。

留学生とどうつきあっていいのかよくわからない日本人学生，そして日本人とのつき合いにためらいをもっている留学生との間にある垣根を取り除ききっかけを作れたら，といつも願っている。国籍も学年も性別も関係ないオープンクラスが私の夢である。